



会報

東京都中学校長会

令和8年1月23日

第436号

発行 東京都中学校長会
会長 佐藤 敏数
〒105 港区西新橋1-22-13
-0003 全日本中学校長会館202号
電話 03(3504)8705
FAX 03(3504)8706

〈巻頭言〉

教員確保に向けて学校でできること

副会長 重山 直毅
(府中市立府中第四中学校)

中学校における技術・家庭科技術分野をはじめとした正規教員、さらには臨時的任用教員、時間講師の確保について、各学校における学校経営上の大きな課題となっています。東京都教育委員会や地区教育委員会も様々な取組を行っていますが、抜本的な改善にはつながっていない現状があります。年末には、令和6年度の全国の教員採用選考の倍率が過去最低になったと報道され、危機感を感じているところです。この現状を変えるには、学校現場でもできることを見出し、地道に取り組んでいかなければならないと考えています。

本校では、令和6年度は英語科教員が配置されず、未経験の講師を2人見付け、何とか少人数指導を実施することができました。令和7年度では、数学・英語の臨時的任用教員が確保できないため、学年によっては1名減員の中で学年事務等を行っている現状もあります。

そうした中で、教員を目指す学生を増やすことも学校でできることだと考え、実習や体験等を希望する学生を一人でも多く受け入れるようにしています。今年度は大学1年から教職大学院2年までの6学年にまたがる12名の学生が、時期は異なりますが、本校で活動しています((教育実習生4名(春2名・秋2名)、教職大学院生2名、インターンシップ2名、学校体験等3名、支援員1名))。学生が学校現場で体験することを通して教職の魅力を感じてもらい、採用試験受験につなげてもらうことが大切だと考えているところです。教育実習生の受け入れについては、大学から追加で頼まれることもあり、教員には、「教員免許が取れなければ教員になれない。」「人手不足は解消しない。」「東京都以外で両方の免許をもっていないと不利になる可能性もある。」などと話し、多くの教員が理解を示してくれています。昨年度

の教育実習生について

は、1名が4月から本校で採用され、もう1名が本校に生徒が進学してくる小学校に勤務しています。小学校での採用であっても、東京都で活躍してくれる人材として歓迎しています。また、偶然ですが、本校には今

年度2組の恩師と教え子の教員が同時に勤務するという珍しいことも起きています。改めて、一人一人の教員が教え子に教員になりたいと思わせる姿を見せていくことも大切だと感じているところです。

次に、一度退職した方や教員免許を取得しているが教員になっていない方にアプローチしていくことも重要です。本校では今年度より、元小学校教員が支援員として週3日勤務しています。子供が大きくなったらまた小学校教員に復帰することも視野に入れているため、将来に向けて長期的に支援していきたいと考えています。

他校の校長の話ですが、複数の免許を所持している力量の高い臨時的任用教員が採用試験に受からずにいたそうです。受験教科を技術・家庭科技術分野に変更しての採用試験受験を勧め、受験した結果、合格し東京都で教員をしているという話を聞きました。人物を見極めて説得し、教員が不足している中で、素晴らしい取組だと感心しました。

都内609校が一致団結してできることに取り組み、将来を担う人材を見出すことで現状を変えていきたいと考えています。どうぞよろしくお願いします。



私は狛江市で2校6年間校長を務めた後、昨年度、自分の母校でもある現任校に着任した。

まず、学校経営を語る上で欠かせないものに「青森ねぶた祭」がある。元々、青森とは縁もゆかりもないが、かれこれ20年近く、祭りやイベント等で、多くの仲間たちとねぶた祭の素晴らしさを伝える活動をしている。その体験が自分の学校経営方針の根幹を成す。

○感謝と笑顔

学校経営のキーワードは「感謝と笑顔」である。「感謝する」ことの意義については様々なところで言われているが、私がそのことを実感したのは、ねぶた祭を通じて、自分が楽しむことより、誰かを喜ばせる、笑顔にさせる方がより幸せになれることを知ったときである。脳科学的に言えば、ドーパミンによる一時的な快感より、人との繋がりから得られるオキシトシンやセロトニンによる幸福感の方がより深く持続性もある。しかも大きな努力を必要としない。

そこで、学校では日頃から、「感謝」という言葉を口にするようにしている。朝礼や学校だよりでは実体験を交えながら「幸せホルモン」の話もよくする。それらは生徒に向かって言っているが、先生方へのメッセージでもあるのだ。

そうしているうちに、先生方も「感謝」を意識するようになり、いつの間にか生徒たちも「感謝」という言葉を頻繁に使うようになっていく。最近では特別支援学級の生徒たちも“オキシトシン”と口にするようになってきた。

刷り込み作戦は着々と進んでいる。

「思考(言葉)は現実化する」と言われるが、きっかけはともかく、まずは学校という場をステップ

にして、互いに支え合い感謝し合う「感謝社会」を創っていくことが私の願いである。

○失敗してもOK

もう一つの大切なキーワードとして「失敗してもOK」がある。

人は生まれたときから好奇心のおもむくまま、何にでも挑戦して、失敗を繰り返しながら学び成長していく。ところがいつしか、失敗は「悪いこと」「恥ずかしいこと」と刷り込まれて、賢い子ほど挑戦しなくなる。だから、安心して失敗できる「心理的安全性が高い」環境づくりが大切である。そこで、ちょっとしたチャレンジをした生徒には、たとえ上手くいかなかったとしても、そばに行行ってグッドサインを送り、その勇気を称えるように心がけている。失敗を恐れて挑戦しなくなったら、そこで人間の成長は止まってしまうからである。

一方で、先生方の失敗にも寛容である。当人のミスであっても、決して叱る(怒る)ことはしない。どんな先生でも、毎日仕事に来てくれるだけで有難いことなのだ。

○ワクワク感を大切に

表題は人生における私のモットーだ。大人が毎日ワクワクしながら人生を楽しんでいる姿を見せていれば、子供は明るい未来を想像でき、それを実現しようと努力しはじめる。子供は素直で、身近な大人たちに大きく影響される存在だからである。

(参考)「松岡修造のみんながなんでも」

(テレビ朝日 2023/8/6放送)



社会総がかりで育む

清瀬市立清瀬第三中学校 井上 隆

清瀬市は、東京都多摩地区北部に位置する自然豊かな街。市内には清流「柳瀬川」が流れ、武蔵野の雑木林が再現されており、水鳥と共に、四季折々の豊かな景観が楽しめる街。農地が広がっていて、様々な新鮮野菜が多く生産され、ニンジンの出荷量は都内1位です。また、清瀬市のご当地グルメとして、「きよせ棒」、「清瀬まん」、「きよはちサイダー」、「キョセゴゴカレー」など地域産品として販売しています。

清瀬第三中学校は、清瀬市の北部に位置していて、本校の裏手には、ニンジンやサトイモ畑が広がっています。食育では、地産地消でニンジンやホウレンソウ等の様々な新鮮野菜を使用した自校式の給食が好評です。そんな土地柄もあり、子供たちは、素朴で素直な子が多いのが印象的です。私は、3年前に昇任校長として清瀬市に着任し3月の市役所での面接後、清瀬第三中学校に初めて向かう日、豊かな自然、校舎脇の菜の花畑に心を打たれ、「一人一人が輝く三中」という文字を掲げられている校舎を見て、どんな思い・願いが込められているのか…と感慨深いものがあつたと、今でも心に残っています。

現在本校は、350人余りの中規模の生徒数であり、ここ数年で教職員の異動で入れ替えがありました。学力調査の結果に課題はありますが、それ以上に日頃の授業、子供の様子、教員、保護者・地域の状況等からどんな子供を育てることが求められているのか、求めるべきなのか…。

これからの予測困難な時代に、労働市場の流動化、就業期間の長期化、マルチステージの人生モデルへの転換が進んでいます。文科省では、次期学習指導要領に向けて、生涯にわたって主体的に

学び続け、多様な他者と協働しながら「自らの人生を舵取りすることができる力」「民主的で持続可能な社会の創り手」をみんなで育むとありました。「みんな」とは、学校・保護者・地域そして教育委員会を含めた関係機関であり、清瀬市では、「みんな」で「社会総がかり」で、これからの未来を切り拓き、生き抜いていく子供たちを育てていくことを目指しています。

清瀬市の取組として、ピースエンジェル事業、国内派遣事業等で、児童・生徒から平和な社会への創造、自ら学びたい分野・関係をプレゼンテーションにより審査し、現地にて広く視察研修を行っています。また、結核菌による感染症の療養所が清瀬市に開設されてからの清瀬市の取り組んできた歴史の理解を深め、後世へ引き継ぎ、世界へ発信していくことを目的に、「清瀬結核サミット」が開催されました。清瀬市の中学生、高校生が結核アンバサダーとして発表やJICA国際研修生とのトークセッションを行いました。これらは、児童・生徒が、「好き」（興味・関心）を育み、「得意」を伸ばし、情報活用能力の向上へつなげる事業であり、「深い学びの実装」への実現に向けた社会総がかりでの取組の一つであると思います。

本校でも、「考える力」を学べる学校を目指し、教師の専門性を高めるために、「デジタルを活用したこれらからの学び」の実践校として取り組んでいるところです。これから、「社会総がかりでどのように子供たちを育むのか」、短期的、中期的な計画を今年度から開始したコミュニティ・スクールの推進を軸に、校長として「一人一人が輝く三中」を目指していきます。

学校経営の判断を支える3つの視点

実践女子大学 教職アドバイザー 中村 一哉 (東京都中学校長会 第41代会長)

春に向けて歩みはじめる最終学期は、学校にとって年度をつなぐリレーゾーン。一年の成果や生徒の成長を振り返り、次年度の教育課程や経営計画の方向性を考える大切な時期。折々に思い描いてきた課題解決へのビジョンを具体化させて方策にまとめる、校長の判断力の発揮が期待される正念場です。

決断力や指導力など管理職に求められる資質は多々ありますが、中でも重要なのは判断力ではないでしょうか。そこで、経営判断にあたってよく言われる「虫の目、鳥の目、魚の目」という3つの視点について考えてみたいと思います。

まず「虫の目」は現実を見つめる細やかな観察眼のこと。昆虫の複眼のように多様な視点で実態を見つめ、立体的に物事を把握する視点です。それに対して「鳥の目」は対象から離れて現象を広い視野で俯瞰的に見つめること。一つのことに捉われず、複数の事柄ごとの関係を構造的に捉える視点と考えられます。「魚の目」とは、潮流によって刻々と変化する状況を敏感に感じ取りながら、何をすべきかを時間軸で判断し決断する視点のことです。

学校は教育内容としての「教育課程」と、それを具現化する方策としての「経営計画」の両輪で起動する組織です。その策定にあたっては、まず実態を正しく捉え判断することから始まります。学校評価による経年変化や地域等からのインフォーマルな情報収集など、あらゆる情報を「虫の目」で多面的、分析的に捉え、全体を把握した上でそれぞれの課題の関係を「鳥の目」で整理しながら取捨選択します。その上で、中・長期的なビジョンを考慮しながら、変化の過程を踏まえた「魚の目」で優先順位や実現可能性などを考慮し

て具体的な取組を決定する。そうした一連の判断によって実効性のあるプランを立てることが、この時期の学校経営の課題です。

経営的な視点をもつ必要があるのは管理職だけとは限りません。特に主幹教諭をはじめ学校経営に中枢として参画する教員には同様の視点が求められます。例えば、この時期には各学年や分掌でも学校評価が行われます。その際に、学年主任には入学から卒業までの三年間で育成する目指す生徒像に照らして、生徒の具体から実現状況を把握し進捗に応じた軌道修正をすること。分掌主任には所掌事項に関する実態把握と情報分析を行った上で、課題解決に向けて段階的な取組を提案することなどが求められます。それに加えて、全ての教員に対して意図的にこのような経営的な視点で考え判断する機会を与えていくことが、教育活動を最前線で進める教員の意識を高め、幅広い視点に立って判断し、学校の組織力を活性化させていく原動力になると考えます。

経営のPDCAサイクルはどこでも実施されていますが、それを「カリキュラム・マネジメント」の視点から充実させるには、特に重要なCのチェックにおける「虫、鳥、魚」の3つの視点に基づく経営感覚をもった判断が不可欠です。そうした意識を育む働きかけが、次代を担う管理職の人材育成につながるのではないのでしょうか。

次期学習指導要領の改訂に向けて、教育や学校の在り方に関するさまざまな審議が進められています。着地点は分かりませんが、学校が子供たちにとって基本的な学びの場であることに変わりはないはず。寒風の中で咲く梅の開花に心を寄せながら、全都の中学校の益々の教育活動の充実と先生方の一層のご活躍をお祈りしています。